
異世界旅行記～引きこもり編～

笠置 有

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界旅行記～引きこもり編～

【著者名】

ZZマーク

N9671W

【作者名】

笠置 有

【あらすじ】

いろんな世界で図書館開くよーな話。

古びた小説。眞実かどうかも分からぬ伝記、神話。子供でも読める絵本。知識の體とも言える辞典。

語りかけてくる言葉は静かで、音もなくそれでいて穏やかで、優しさだけで、淡白で余分の無いそれに一生埋もれて生きていくことが、私の幸せだ。

埃と湿氣を含んだ重たい空気が満ちる部屋には数えきれない本たちが眠っている。

書き手は遙か向こうからこれを生み出して、人に伝えようとした。人の意思が知識の中に息づいている。それが感じ取れるこの場所が好きだ。

空間図書。この場所の名前は寂れて人の記憶の中から消えて久しい。求める人だけに開かれる知識の扉、なんていうと大概大げさだらうか。けれど、幾分伝説じみた定義がこの場所の眞実だ。今日も、数

少ない訪問者が訪れる。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

おや？と思つたのは通いなれた道に見慣れない外観の建物を見つけてからだ。思わず立ち止まる。

なんてことのない風景ではあつた。けれどもどうしても見落とせない違和感があつたのだ。地味な木目の扉に古びた円形の取っ手。美しい薦と花が這う外壁。群青に近い、夕闇が近づく頃合いに見る空の色と似た屋根。それはどこにでもあるようで、何よりも住み慣れたこの街には似合わない景色だった。

ほんの好奇心。手持ちぶさたといつともあつた。せつかくの休みに外へ繰り出しても目的が果たせなかつたから。それだけのこと。その扉を開いた理由は。

古びた外観を裏切らない、鈍い扉の開閉音がギイと鳴る。一步踏み入れたそこは生温かい空気が漏れだして、日の光が一切射さない薄暗さの中に、ぼんやりとランプの光が揺らめいていた。不規則な感覚で揺らめく明かりに不自然を感じて、「上」を見上げた。

「…………」

はつきりとした視界を得られない薄明かりの中、すうりと威圧的に並ぶ影。

圧倒される高さの、本。本。本。そこは四方すべてが書物で埋め尽くされていた。

引き寄せられるよつに近づけば、見知らぬ言語の背表紙もあれば、自分が知る言語で書かれたタイトルも並んでいた。ふとその一冊を手に取る。「ここがどこなのか、何なのか。そんなことも頭から抜けてしまっていたのだ。それはその書物があんまりに自分の興味的に突き刺さるものであつたからでもある。だが不注意だった。

「お皿に適うものがありましたか？」

「つづ・・・」

気配。ここまで近づかれるまで全く気がつかなかつた。不覚！

後ろへと大きく飛びのき、腰にさした剣を横廻ぎに掃う。手じたえが、ない。

「何者だ！」

体にしみついた構えをとり、真正面から声の主に向き合つた。向き合つた、はず。なのに、

黒い影、と思った。敵意のないそれに幾分警戒を緩めると、その姿がよく見える。

女はうつすらと笑んで言ひ。「よつこひこひつしゃいました。空間図書館へ」

確かに、声の位置からして射程内だった。この感覚は幾度も繰り返し繰り返し体が覚えた生き残る術なのに。

黒に近い髪。白い肌。ランプの光を映して揺れる瞳を緩めて、その女は目の前に立っていた。

とある国の、亡君の騎士

薄明かりだけが照らす室内。紙とインクのにおい。古臭い、カビと埃のにおい。そこには俺の探し物があった。ずっとずっと探していたものが確かに存在していた。古の秘術。忘れ去られた禁忌の法。の方はきっとお怒りになる。けれども唯一といつてもいい自分のわがままだ。あの人ガ、頂点に立つ姿を見たい。そしてできればそばにありたいと思う。

けれどもしかしたらそれは、叶わない願いなのかもしない。諦めていたのだ。本当は、もうどうの世に。

にもかかわらず

「ありますよ。魔術。鍊金術とか。法術が近いかもされんね。ああ・・・死靈術というのもござりますね」

なんてことをしれっとした顔で言ひ。この女。一体何なんだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

感情のない顔をした女だつた。そして異様に気配が希薄でもある。国の王族近衛騎士として、自分の武術の腕は確かだ。驕りではなく、実績もそれに劣らぬ鍛錬も積んできた。それなのにこの女が近付いても声をかけられるまで気がつくことができない。背後をとられて

もなお、だ。

加えて何度剣を抜こうが顔色一つ変えることなく、かわす様子さえ目に捉えられず、ただ目の前に立っている。・・・あきらかに、おかしい。

信用ならない。警戒してしかるべきだ。なのになぜか気がつけばするりと隣に並んでいたりする。

膨大な蔵書は国の隅々を探しつくしても見つけられなかつた知識であふれており、一から探すのでは際限がない。しかしこの女はそのすべてを知りぬくしているようであった。

ぼそりと「体の老化は進んでいないのに・・・」と呟けば、そして時間置かずに呪術の類の本ともう片手に紅茶の載つたトレイをもつて現れる。足音さえ立てずに。

手元の本に集中していれば、毛織の掛けものをそつと脇に置かれていたことさえある。それに気がつけば、確かに時間を忘れて睡眠をとつていなかつたと思いだす。

妙な女だつた。どうやらこの「空間図書」を仕切つてこるのはこの女一人らしく、それ以外の姿は見かけたことがない。自分以外の閲覧者も同様に。

そして今日も、古びた扉を開く。

「ようこそいらっしゃいました。スヴェルテン様。じゆるつじびつ
ぞ」

もう見慣れた陰鬱な本の博物館へと訪れれば、カウンターの仕切りを挟んで向こう側に座る女が、口元を緩めるだけの笑みを見せる。しかしこの「じく」その変化は一瞬で、視線はすぐに手元の本へと移されてしまい。

ああ、と答えて先日取り置きした本をカウンター脇の棚から引き抜いた。

どうもおかしなことに、ここに蔵書はすべて持ち出すことができない。

倫理の問題ではない。規則でもない。「図書館」と銘打つこの施設は貴重な書物を読みながらの飲食さえ許す緩さがあるのだ。それほど「書籍」自体にこだわりがないのもこの館主の様子を見ればわかる。

持ち出すことが、出来ない。言葉の通りだ。抱きかかえて持ち帰ろうとしたところでの建物を出た時には腕の中は空。ここから、持ち出すことが、できないのだ。

この蔵書量と内容の濃厚さ、種類の豊富さをみてわかった。きっとそれは実現可能な現実として成立する。王を、呪いによつて醒めぬ眠りの淵にある主君を救う知識がここにはある。

それを実感して焦りが湧いた。早く早くと急く心のままに館主たるこの女に頼んだのだ。

「どうか、この書物を持ち帰ることを許しては頂けないだろうか。
もちろん必ず返すことを約束する！」

一刻も早くこの術を完成させる必要があるのだ。だが私にはこのよ
うな分野の才能はない。知識のあるものに伝えたい。頼む」

ただただ焦りの一心で膝をついた俺に女は言った。

「可能なら、どうぞ」

ただ一言。

じある国の、亡君の騎士2

結論からいえば、持ち出すことができなかつた。

なぜ、と問うだらう。普通でない。異常だ。こゝは・・なんだ？

興味の無なうな顔で女は、先ほゞまで俺の手の中にあつた本を片手で掴む。まるでそこから、空から突然現れたかのようなその本を。

「失礼いたしました。当館を」J利用いただく際にお話ししておくれ
き規則が3つほどあります」

1つ

「当館に所有する書物はすべて各界共有物となつております。持ち
出しが不可能です。攝理上連続しておりませんのであしからず」

2つ

「当館内における傷害行為及び干渉行動は認可できません。」

3つ

「当館は求めるべく知識を持つた方のみがご利用可能です。対象と
ならない方には」J利用できませんので」J了承願います」

以上です。流れるように抑揚なく言こきつたが最後、女はカウンタ
ー裏へと姿を消した。

「は・・・

意味がわからない。

思わずぐしゃりと髪をかき乱して後ろの棚に体を預ける。

と、カウンター裏の壁向かいからひょいと女が顔を覗かせ、いつも
の薄い笑みを浮かべた。

緩慢に顔を上げた俺に向かつて手招きをする。

「見ていただくのが早いかと」

「（なんなんだ一体・・）」

どうにでもなれ、という思いで女の細い背を追つてカウンターの向
こうへと足を踏み入れる。ここに入るのはこの図書館へ通つて1月
経つが、初めてだ。妙な緊張と、物珍しさに周囲を見渡す。

雑然と物が置かれているが、そのどれもが珍妙な形をしている。つ
るりとした凹凸の無い入れ物に湯が張られていたり、四角い箱のよ
うなものから光が漏れていったり、向こうのものは・・

「・・・・?」

のつべりとしたねずみ・・・しかも大型の・・・いやしかし体毛がない上に顔さえないので。それが小さな音を一定で発しながら床を這つている。

かたん、と肘が横の湯を張った容器に当たつて

「熱い！」

思わず叫んだ。と横合いから白い手が伸びてそれを遠ざける。

「何をなさつているのですか」

呆れたような音色で呟かれるがそれビンゴか。

「なんだこれは！」

「なにって・・・コーヒーメーカーですけど・・・」

「「」一ひ一め一かー？」

聞きなれない言葉を口に乗せて繰り返すと女はああー・・・と珍しく言葉を濁して視線を横に流す。

それを気に留めずに足元の奇妙な大型ネズミ（？）はどうするのかと問うと、口を噤んだあとにぼそりと何事かを呟いた。小さすぎて聞き取れなかつたが。

「これだけ広いと掃除が・・・」

「なに？」

「いえ、お気になさらず。先ほどお話しした規則に通じるものです。ご説明することは出来ますが、納得されるには実際目にされるのが早いかと」

これはまた珍しく眉根を寄せて氣まずそうにしたかと思えば、またもとの感情が薄い表情へと戻ってしまった。

惜しいな。ふとそう思つ。感情の濃淡が希薄な者の表情が揺らぐといつのはなかなかに面白いものだ。今年入つた騎士見習いの渋い顔を思い出して、意図せず笑みが漏れた。弟のような年、じろの部下をからかうのが楽しいとは自分も年をとつたのかもしれない。その姿と重ねるには幾分この女は自分と年が近にように思うけれど。

先導するために背を向けて見えなくなつた無表情に、人形のような得体の無さは感じなくなつていた。

とある国の、亡君の騎士3

珍妙なものが並ぶカウンター裏を抜けて、扉を3つ抜けて、地下へと延びる階段を下りる。先が見えないほど延々と続く闇に怖気づく様子もなく、女は先に行く。2人分の足音だけが反響する空間は決して心地よいものじゃない。それにしても。

「（無口な女だ）」

分かつてはいたが、それほど氣にしていなかつた。それはこの女が持つ妙に希薄で現実味のない存在感のせいでもあつたし、興味の対象がそこになかつたためでもある。

人形のようだと思った。表情の無い、折り目正しいが意思の色が乗らない会話に人間味が欠けていて。だが意外と、そうでもないらしい。そう思えば人並みに相手を知りうつという氣にもなる。

「なあ」

「何でじょうか」

隙の無い物言いはひとつつきやすいとは言えないが。こりひりを振り返

る様子もない。

「『ど』へ向かっているんだ」

「・・・・・」

沈黙。ただ段差を下り続ける足は止めようとしない。

「おー」

「『ど』と申されましても説明しがたく」

「説明できないような場所へ連れていいくつもりか?」

「・・・・・いえ。私の語彙と表現力がござしいので、理解していた
だくには言葉では足りないかと思われます」

「何だそれ」

平坦な言葉が少し拗ねた口調に聞こえて笑い混じりた言葉を返す。

すると前を歩く背が少し速度を落とした。軽く横に傾げられた首に含わせて短い髪が揺れる。

「時機に、着きます

緩めた速度をそのままに半身だけ振り返って見せた、少しのぞいた表情にも不可思議そうな感情が見えた気がした。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

こちらへ、と導かれた先には階段の終わりとともに端が見えない空間があった。暗い、だが視界が奪われない程度の明るさ。その光源となつてているであろう

点滅する映像が、目前をよぎつては消えていく。ひとつ。通り過ぎてはふたつ。交差して上へと昇つていぐ。半透明の絵画とも言おうか。景色なのだ。その絵画一つ一つが鮮やかで、色彩に富んだ風景。風に吹かれて飛ぶ木の葉のように巻き上げられ、時に暗がりに消え、また現れてはこの場を行き交つてゐる。手を伸ばせば、届きそうな。

「触られないほうがよろしい

びしづと叩きつけるように言われて、伸ばしかけた手を宙に浮かしたまま止める。思わず手に取つて眺めたいほどの美しさだった。

「各世界に連續性はありません。すなわち、「この世界」とその他は全く関連していない。私はただそれを繋ぐ役目を担うだけ」

と女がちょいちょい田の前に過った景色に手を伸ばした。触れた、よう見えた。だが絵画の額縁サイズのそれは指にまとわりつく様に引っ掛けり、一気に膨れ上がった。

「なつ・・・」

暗さに慣れた目に光が沁みる。反射的に閉ざしたまぶたの裏が白一面で満ちて、それが徐々に収まるとともに肌をなでる新鮮な風に驚く。

ゆつくりと、まぶたを上げる。澄んだ薄青と柔らかな田の雲で覆われていた。視界すべてが。

草木の擦れる音が耳に心地よく、地面が湿度を含んで大地の香りを運ぶ。

室内から外へ？そんな次元じゃない。一体なんなんだ。この野原のど真ん中に放り出されたような状況は！

「どう・・・いつ」とだ

混乱の只中に落ちる男一人など気にかける様子もない。

吹きぬける風と真昼の位置にかかる太陽の陽を浴びながら、数歩分離れた場所に立つ女は細めた眼を柔らかく緩める。

「貴方様が生活される世界だけではないのです。世界は広く、多数、多様、多面に溢れるほど存在している」

「そしてこの場所もまた平行する世界」

淡々として語る女の言葉は俺の知りうるもの全ての斜め上を行つていて、上手く理解できない。

と唐突に奇怪な音が尾を引くほど長く、高く伸びて響いた。
見慣れない柔らかな微笑につられて空を仰ぐ、白い鳥が群れをなして遙か上空を飛んでいる。いや・・遙か上空を・・?鳥、が?

「フェニックスですね」

眩しげに皿を細めて手で底を作りなんて」との無いように上空の陰を追う女の言葉に、だらしなく自分の顔面筋が緩んだのがわかった。いや、顎が落ちるとはこいつこいつとか？

鳥と呼ぶにふさわしくない巨体に、優雅な曲線。飛行の跡が光の帶となつて粒子を降らせる。

「伝説の不死鳥・・」

「ですね」

俺の常識はどうへ行ったのだろうか。

とある国の、亡君の騎士4

広大な自然と、遙か過去に滅びたはずの伝説上の生き物を茫然と目で追えたのはきっと数分にも満たない時間。そのあとは濃密な現実感が薄れいったかと思えが、また光の景色が飛び交う暗闇の中に戻つていた。

瞬きして、現実感の薄い状況を咀嚼しようと、する。足元も頭上も自分の体にも視線を廻らせて、ついでに拳で目を擦つてみたところで先ほどの鮮やかな色彩は戻つてこなかつた。

訳がわからない。これを理解しろなど、おかしいだろう。俺は失われた秘義の知識など持たない、ただの騎士だ。

それなのにこの女、暗い部屋に戻つてきたかと思えばまたひとつ、ひとつと景色を引き寄せてその中へと俺ごと連れて行こうとする。連れていく、とか中へ、という表現が正しいのかは疑問だが。

そこは植物事典でしか見たことないような巨大生物の密集地であつたり、半裸の黒人種達が両手を振り上げながら舞い踊る空間（不気味だ）だつたり、鉄やら鋼なんていう貴重な金属が文明にありふれている場所であつたりするのだ。なにより、あの雑多な音のほとんどが珍妙な四角い箱の中から聞こえてくるとつ目を疑つ、いやこの

場合は耳をか？・・・まあとにかくもづ。

戦場でだつて感じたことのない脱力感と困惑に膝を折つてしゃがみこむ。癖の強い自身の髪をかき乱してからりょくよく思考の渦へ沈み込む。

何なんだ？何が、現実なんだ。とも考えて、よくよく現実味がないのはこの図書館からしてそうだな、と思考がそこへ至る。

「いじは何なんだ？・・・君は、何者なんだ」

情けない声しか出ない。掠れていて、多分恐れさえ含んだ音色になつてしまつたことに恥じ入る余裕さえない。座り込む俺の前に、静かに女は膝を折り目線を合わせる。近くで見れば、女の目は黒ではなく、深い赤茶色の、琥珀の色をしている。きれいだな。ふとそう思う。静かに凧いだ瞳に見据えられれば不思議と冷静に言葉を待つことができた。

「ここは、時空図書館。多元の世界の中にあり、どこにも存在しない。知識の宝。世界にあるすべてを納めた空間」

そして、と女は続ける。ゆっくりと立ち上がり、数歩距離をとったかと思えば、恭しく片手を胸の前に当てて頭を下げた。

「私は当時空図書の総管理を務めます。館長のヨギナと申します」

突然現れた妙な建物に、いくら探しまわるうと片鱗すらつかめなかつた呪術の解法。それが当たり前のようにある、この場所をおかしいとは思いつつも知りうとしなかつた。

どうでもいい。それよりも、と未知の空間を受け入れていた。館主たるこの女は、それでも何を語ろうともせず。だから、良かつたんだ。ただ。ただ。ただ。・・・・方法さえ見つかれば。だが、そんな俺に見つけられただろうか？古人の叡智の體。古の秘義。戦闘馬鹿とさえ罵られる俺に？

そうなのだ。俺はただ焦っていた。ただ主にもう一度、目を覚ましてもらいたくて、あの威厳ある姿と快活な笑みを、賢王と呼ばれた彼に戻つてほしくて、仕えるべき主君として・・・友として、隣に在れた時間がどうしようもなく尊いものに感じて。一度はあきらめたのに、もしかしたら手に入ると知つたらもうそれしか目に入らなかつた。

ああ見つとも無いな。本当に、情けない。

顔を膝につづめたまま小さく笑い続ける俺をどう見たのか、女は、いやヨギナは腰をかがめてそろりと片手を差し出してきた。

「求めるものが、御有りなのでしょう。それは存じています。知識を求めるならば、それを渡しましょう。私の、役目ですから」

眼前に差し出された手は白くて細く、消えてしまう幻想のようだがたが、それは掴めば暖かく、決して消えなかつた。知識を求めるものにのみ、開かれる。そこにあつて、どこにもない知識の宝庫。

「ここには俺の求めるものが必ずあると、知識の主は言つ。

何度も思つたものだ。

あいつは王になど向かない。こつして俺と一緒になつて騒いで笑つて、時に殴り合いの喧嘩までして、それでもまた笑い合えたから。権力と思想渦巻く箱庭の主など出来るはずがない。けれど、それが自分の独りよがりな思い込みと気がつくのにそう時間は要らなかつた。

先王が倒れてからのはあいつは間違いなく王族だつた。感情の揺れを微塵も感じさせない確固とした佇まいに民は従つた。公正であり時に冷酷なほど潔い決断を下す明晰な判断力と統治力は、俺の友であつた男を歴史に名を刻む賢王とした。

ならば、と出来の悪い頭でよく考えたのだ。ならば、俺には何ができる?

友としてただ傍に在ることが出来なくなつた今、一体何ができる。

硬質な鋼がぶつかり、摩擦を起こす甲高い音がそこらじゅうで鳴り響いている。気合の入った掛け声やら時には痛みに呻く声、勝利の雄たけび。そんなものが木靈する訓練所はむさ苦しい熱氣で満ちている。城の一角、兵士たちの宿舎裏という立地もあり年若い侍女らの姿もちらほらと見えるが、どの顔も町娘たちのように憧れを映してうつすら紅に染まる初々しい表情とはほど遠いものだ。

それもそのはずだ。この男所帯に清潔感や高潔を求めるのは無茶とこるもの。

慣れた様子で汗のしみ込んだシャツやらタオルやらを洗濯場へと運ぶ侍女たちの顔はどうみても出来の悪い、あるいは遊び盛りの息子でも見守るような生温かい表情ばかり。いや、感謝の言葉しか出でこない。

とはいえ。今年は豊作ばかりだ。

砂埃を舞い上げながら剣を構える若手たちへと目を向ける。いつの間にか指導者として後輩を見るようになつて数年経つが、特に今年は例年になく新米の成長が目覚ましい。

いつも決まって中央に陣取り、剣を打ち合つのはイルノとジャン。貴族出のイルノは教本にそのまま載せても問題ない正攻法で受け流す型を取り、平民出のジャンはスマートなそれを打ち崩そつとがむしやらに打ち込む。正反対で、どちらも引き際を知らぬ負けず嫌い。

その2人を離れた所で休みつつ、ほほえましく見守るのがエヴィル。細い体に甘い顔立ちの優男然とした見た目にその実、策略家向きの性格をしている。よくイルノとジャンをからかつているのを見かけたが、仲はそう悪くないらしい。

外周を走る一団のなかで一人群を抜いて速いシイナに、隅で黙々と筋力増強メニューを消費するジェスター。

爺臭く有望株達を眺める。と背後から土を踏む音が近づく。

「今日も変わりないか」

ライ、と母親とただ一人友以外に誰も呼ぶことの無い略称に振り向くと、見慣れた快活な笑みと立場に似つかわしくない軽装をまとつ男が一人。

「そちらこそ、変わりないようで。我らが殿下」

「手厳しいな。大臣たちの真似か?」

「まさか。今さら古狸どもだって無駄な問答はしないだろ?」

「ああ、違いない」

殿下——つまりはこの国の王族。間違ひなく尊い血筋に名を連ねられる王の子。

第一皇子「オズワルド」

「ん？・・・なんだ珍しいな。お前がそう呼ぶのは

「いや、忘れているのかと思つてな。こつも眞輕に兵たちの前に姿を見せる王族もさういないだろ」

大して考えもせぬ言ひた言葉に、とにかく氣持ち悪いからいつものようにオズと呼べ、と氣安く返される。ああ、と返事を言おうとして、その後に見せた儂い笑みがやけに田について言葉に詰まった。

今にも消えそうな表情のまま、オズは訓練場へと田をやる。突然現れた王子に気がついたものはわずかだが、敬礼をとつて腰を落とす同僚の姿に、その目線の先にいる人物に気がついた若い兵たちは慌ただしく訓練の手を止めて礼の姿勢を向ける。しかしそんなものは気にしない殿下は少し眉根を寄せて、よせとでもいう様にひらりと手を払う動作をして見せる。まったく王族らしくない王族ものだ。いつものことながら。

呆れる様子に気がついたのか、ちらと俺の方を見て今度は影の無いいつもの笑みを浮かべてみせた。
そしてまた俺の名を呼ぶ。なあライ。

「いの国を変えよつか」

「・・・こきなりなんだ」

「父は時機に死ぬだろつ。そつ遠くない未来だ。そして俺は王にならぬ。良くも悪くも時代の変わり田が訪れる」

「ちよ、お前句を」「そのときにはさ、」

「くらなんでもこんな場所で言つていい言葉じやない。立場も状況も省みない言葉を遮りつつ思わず口に出した言葉を、そりて遮つてオズは言つ。

「お前が、横に立つていてくれるか? 友として、誰よりも信頼のおけの臣下として」

「そんなこと一々言われるまでもなかつた。俺が何より望むこと。皇子だらうとHだらうと側にある。」

「勝手に見くびつてくれんなよ、オズ」

だというのにこいつは、俺の友は、恐る恐ると言つた体で言葉を選び、不安そうに瞳を揺らしている。

勝手に言つてくれるな。お前の中で俺はそこまでちつぽけな人間か？ただなんとなく、側に居続けたと本氣でそう思つてゐるのか。腹の奥が燃えるようだつた。ふざけるな。

いつも真正面から見つめてくる澄んだ空色の瞳が揺れた。息を吸つて、何か言葉を発しようと動いた口が形をなす前に、

劍しか能の無い、学の無い俺が王族のお前と対等でいられるわけねえってそんなこと嫌になるほど分かつてる！だから、こいつって・・

騎士になつたのに。友としてただ側にいられない時がいつか来る
ことは分かつていたから。

なのにお前はそれを信じてくれないのか？それだけでは足りないの

か

絶望で白く染まつていいく頭の中と対照的に、米神が熱く疼く。餓鬼みたいに声を張り上げて、目の前の顔を見たくなくて、見つとも無い顔を見せたくないで顔を俯かせる。と、目の前の細身の体が小刻みに揺れているのに気がつく。

おい、まさか。

クス、と小さく聞こえた笑い声がだんだん遠慮の無い大声になつて、その発生源から伸びた腕が頭一つでかいはずの俺の頭に載せられてグシャグシャと撫ぜまわされる。

「泣くなよ」

「は・・・誰がつ！」

「騎士団長様が、だらうっ、ほら、その厳つい顔を俯かせるな。兵たちが見ているぞ。しかも俺がお前を泣かせたみたいじゃないか！」

思い切り顔を上げると、訓練場にいる兵たちが一人残らずこちらをぽかん、といった様子で凝視していた。一気に頭が冷える。顔が熱い。

「手を止めるなっ！まだ訓練時間は終わっていない！」

びりびりと響いた怒声に、全員が一糸乱れず敬礼と返事を返して散つていいく。

「おまえが変なことをいつからだ・・・」

「おや、俺のせいか?」

「それ以外ないだろー!」

「やつか

「ああー・・・俺の立場をどうしてくれる・・・」

「いや、な。親しみが沸くだろ?」

お前な・・・といつて落ちてきた前髪を搔き揚げると、幼いこりから変わらない笑顔がそこにある。

「お前がいてくれるなら、王になるのも悪いことじまかりじやないか

らな

ああもうその嬉しそうな笑いをどうにかしろよ。と思いながら、友のこの笑顔が失われることがないよう側にある」と誓つたのだ。

とある国の、亡君の騎士 5

それから。

物語の続きのようにそれから、といつてもすることに変わりはない。無限に、と言つてもあながち間違いじやない数の本を口がな一日読みふける。相変わらず気配の薄い女館主の入れる紅茶やらやけに美味しい菓子を味わいながら。

そういえば一つ變つたことがあつたか。この図書館にいつもいと思つていたヨギナという管理人は時折いなくなる。といつても目の前から消える、とかそういう常識外れなものじやないが。

その日は確か・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

その日は雨だった。冬というにはまだ幾分早くて、秋と言つには寒すぎる日和。氷のように冷たい雨がしとしと、時に穿つように激しく降るそんな日だった。午前の仕事を終え、収穫祭の時期だとうのに王の不幸で静まり返る街を抜けて、路地の奥にある古びた扉を開いた。いつもならここで声がかかる。が。

それがない。静まり返つた本の森だけがずんぐりといつもと変わらず佇んでいたのだ。

中世ヨーロッパ?といつよりはゲームの中の栄えた町。

人は多く行き交うのに、どの顔を見てもどこか沈んでいる。街の様子を見る限り貧しさとは縁遠いように思えるのに。町民の恰好を見ても、装飾品店だらうと思われる店のショーウィンドウを眺めても細やかな作りの細工がよく目に付いた。技術レベルの高い世界のようだつた。ふと自分の恰好を見下ろす。ザックリとした白の毛糸で編んだワンピースに細身のパンツ。不自然にならないよう装飾の少ない膝丈のブーツを選んだけれど、あまり気にする必要はなかつたようだ。ただし自分が異邦者だという自覚がある訳で、心もとないことは変わりなく。喪に伏すように悲しみが覆つこの街で、何か得られるものがあればいいのだけれど。

そしてそれが、あの生真面目な騎士の心配を取り除く種となればいい。

魔術なんてものが実在する世界も確かにある。けれど、この世界はそれが廃れた後の時代だった。知識を蓄えた多くの魔術師・専門家たちが去り、残された知識は年月とともに風化して、それを使う能力が息絶えたそんな場所。

「わ」であることを知っている。だからわざわざ「その世界」ごとに外へ出て見聞きする必要なんて本当は、無い。知識はすべてあの図書館に集っている。そしてわたしはそのすべてを知る権限を持っているのだ。

でも。でもね、

「あんな必死になられるとなあ」

初めて生真面目な騎士さまが扉を潜ってきたのは半年前。悲壮な顔をしていた。この場で死ぬんじやないかこの人。と思つよつた顔だった。

「本当に、死にそうな顔してた」
思いだすと少しおかしい。口元がむずむずする。だつて、本当に死

にそつた位苦しそつた。

死体処理が面倒だったとか、陰鬱な顔見せんなよただでさえこの陰鬱な図書館なのに気が沈む、とかそんなことも考えはした。けど結局。ただなんとなく彼を、彼が気に入ってしまった。寝食も忘れて知識を貪るのはどここの世界の客でも一緒だ。けれど大概は「知りたい」という欲求は自己満足で、学者だとか旅人だとか自由に求めることを望む人が訪れることがほとんどなのだ。

違つたなと思った。

あ、違う違う。これは、なんだろう。この人は何で知りたいんだろう。分からぬ。なんで？

それをわたしが知りたかったんだ。

お客様の事情を聞いてはいけない。なんて規則がある訳じゃない。駄目だなど勝手に思つただけ。それって死にそうな人に何で死ぬんですか？って聞くのと同じことだろうから。無神経。空氣読め。だから原始的に足で情報を集める。ちょっと意地もある。

「呪い」「眠つているのに体は老いない」「騎士」その単語だけがヒントだった。

けれど数少ないそれが十分すぎるヒントだと、ここに来て分かつた。

しゃり、と歯触りの良い「リンゴ」のような果実をかじる。甘い。咀嚼しながら商人との会話を思い返す。

(「イリの王様は5年前から眠りつづけて起きないんだとか。」)

年をとることなく眠り続ける。

シャク、ともづ一口。

(「死んだよつい眠り続ける。食事も摂ららず、息もしてないが心臓だけ動いている。まさしく…。」)

「呪いだ」

まるで物語の中みたいな。

食べかけのリンゴが手の中であると滑って地面に転がる。ベコリと嫌な音。「あ、」踏まれる、と思った。地面ばかり見つめていた視界に3対のワークブーツが入り込む。

「考え事をしながら散歩なんて危ないですよ、お嬢さん」

伸ばされた白い手が地面に落ちたリンゴを拾い上げた。

滑らかで白くみえた腕が落ちたリングを握んで、ひざに差し出される。

いかにも優男然とした顔に似合ひの笑みを浮かべた青年だった。

「あ、すみません」

ここに謝ってしまうのが日本人の性というやつだらう。
なんで謝るの?と聞かれるることはや數十回。世界渡りの度に不思議
そうに首を傾げられることに気が付き、そこはぐっと耐えて笑顔を
見せるのが正解だということを学んだのに。
だから無意識の習慣は怖い。

取りつくれる様に笑んでを見せたわたしの考えなんて知る由もないだ
ら、青年は愛想よく微笑んだまま。

「憂いが綺麗に見える女性は素敵だけどね。その肌に傷がつくな
がつては大事だから。気をつけて」

なんとうタラシ文句だ。出身地では聞いたことがないような仄かに寒い言葉の羅列に呆気にとられてしまい、とつさに言葉が出てこない。とそれを代弁するかのように大きなため息が割り込んで来た。

「お前よくそんな言葉がすりすり出でて来るね。俺ちょっと信じられない」

「エヴィル。悪ふざけが過ぎます。出合った女性を片つ端から口説くのは止めなさい」

この軟派な青年と同じくこの年だらう、連れと思われる青年2人から、一方は呆れたように、もう一方は羨めるように声がかかった。なるほど。心底軟派な気質の青年のようだ。まあ知ったことじやないが。

そんな言葉に堪えた様子もなく、エヴィルと呼ばれた青年は両手を上げて降参のポーズをとつて見せた後、鼻で笑つた。

「まあまあ、ジャンもイルノも女つ氣がないからこそ、そつ僻ぱすともいいのこ」

なんというか、あからさまに人を苛立たせる言動だが、まあこの程度の言葉に乗せられる事もないだろうなあとふと視線を移せば、後ろの2人は分かりやすく青筋を立てて顔を引きつらせている。・・・・・。いくらなんでも乗せられやすすぎじゃないだろうか。でも軟派青年の態度を見る限りはそれを目的としているようにもなんとなく、思えた。よつは仲良しなのだろつ。

そんな彼らを見てふと何かが頭の隅に引っ掛けた。

見覚えがある。

彼らの纏つ揃いの衣装。濃紺を基調とした軍服、とでもいうのだろうか。

左肩の飾りで背を覆つマント式の布を留めてあり、鎖骨付近から横腹に斜めに流れる合わせ部分から、一体どのように着脱するのか全

く想像できないこの衣装。右腕にこれまた不思議な色合いのラインストーンか宝石かという石が付けられている。きっと偉い人ほど多いという勲章的なものなのだろうと、乏しい知識で認識していたそれは、彼らの纏う衣装にも付けられていた。

つい最近。身近で見た彼の衣装にも同じようにそれがあった。目の前にいる青年たちのそれに比べて幾つか大きいものが並んでいた気がするけれど。

そう。そう、だ。

わたしがゲームか何かの登場人物ならここで頭上にびっくりマークもとい「！」というのが浮かんでいただろ？。まさにビビットきた。

「スヴェルテンさんと同じ格好だ」

そうそう。なんか見覚えがあつていい、ね。ここまで来てるのに…

つていう感覚が気持ち悪かったのだ。

ああこれですつきりした。もやもやが解消してすがすがしく笑つてしまつたわたしをどう見たのか、青年たちがまじまじと見つめてくる。

「「「隊長の知り合ー?」」」

あ、もしかしてこれは当たりですか。

出来すぎた偶然は、時々仕組まれたみたいに落ちてくれる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9671w/>

異世界旅行記～引きこもり編～

2011年11月20日00時43分発行